国立大学病院における「患者図書室」の現状と課題 2018
患者に医療・健康情報を提供するには

折　井　　匡　（信州大学医学部図書館）

１．はじめに

信州大学医学部附属病院の外来棟の新設に合わせて、2009年5月に患者図書室である「こまくさ図書室」が開室した。当時医学部図書館の担当者として、この図書室設置の企画段階より参画し、画期的な図書室ができたと考えている。[1)]

開室した2009年より複数の学会や研究会でこまくさ図書室をPRしてきたが、果たしてどれだけ「こまくさ図書室」の波及効果があったのか、実態を調査したいと考えた。国立大学病院の現在の患者図書室の現状を知りたいと思い、試行的に文献調査やインターネット検索で調べたところ、病院図書室についての調査結果は発見できたが、大学だけでなく民間の私立病院も含めた調査が主であった。

２．先行事例と再調査

2006年7月に開催された第23回医学情報サービス研究大会千葉大会（MIS23）において、愛媛大学附属図書館医学部分館の土出郁子が「国立大学法人における病院図書室と大学図書館の連携について - アンケート調査報告書 - 」（アンケート実施は2006年6～7月）を発表していた。土出に連絡して詳細な資料を求めたところ、「国立大学病院における「患者図書室」の現状と課題－医学図書館との協力体制に基づく患者への図書館サービスの提案－」を京都大学平成19（2007）年度修士論文として発表していた。

内容は患者図書室の定義から始まり、患者と図書館サービスの関係を19世紀から現在に至るまで詳細に考察した論文で、最後に国立大学病院の患者図書室についての実態調査があった。

土出の調査から10年が経過していることから、再調査の必要性を思い立ち、著者に許諾を取り調査準備に入り、2018年の科学研究費補助金の奨励研究に応募したところ採択され、12年目の再調査となった。

３．　調査について

３－１．目的

先行調査を元に、12年目の実態を調査し比較検討する。

３－２．実施計画

(1) 先行調査の調査内容を踏襲し、国立大学病院における患者図書室が、医療情報を必要とする患者または患者の家族などに対して、どの様に情報を提供しているかを明らかにするため、アンケート調査を実施し集計する。
また、先行調査と同様に医学部図書館との連携を調べるとともに、新規項目として公共図書館との連携についても調べる。
(2) アンケート結果を精査して、他とは特異な患者図書室を抽出し、実地調査を行い、実施状況についてまとめる。
(3) それらの調査から、患者が求める情報をいかに患者図書室が提供するのが良いかを考察する。

３−３．アンケート調査及び調査結果

2018年10月に行ったアンケート調査の内容と結果を、別ファイルとしてリンクした。今回新規の質問については、アンダーラインを引いている。回答大学名等については記してない。

病院患者図書室アンケート調査.pdf
医学部図書館アンケート調査.pdf

３−４．アンケート結果の概要

(1) 前回は42の大学病院を調査したが、今回は4つの大学にある分院を加え46病院を調査した。（前回の調査ではカウントの単位が「大学」であったが、今回は「病院」としている）回答数は33大学から40病院と増加している。
(2) 患者図書室の有無については、「ある」が1割ほど増え28病院となった。
(3) 患者図書室が無いが、院内に図書コーナーやワゴン巡回を実施している病院があった。また、患者図書室の新設については、計画があるが2病院で同じだが、「院内に意見としてある」は減っている（5→2）、逆に「計画が無い」という病院が増えている。患者から患者図書室の設置希望がない、と回答した病院が5大学から7病院に増えている。
(4) 患者図書室がある病院への調査
① 資料の内訳は、多くが小説等の一般書で、平均蔵書冊数も増加している。一方医療健康書や医学書は蔵書の1割に留まっている。
② 資料購入費を予算化している患者図書室が増えたが、いまだ半数が寄贈図書だけを扱っている。
③ 無人図書室は減少した。１週間平均開室日と１日平均開室時間が増えた。概ね平日に8時間開いている。
④ 開室時のスタッフ数を問う質問の回答で多いのは、複数から1人に変わった。
⑤ 患者図書室スタッフの主な仕事は、前回同様に「図書の貸出」「図書の整理」が

中心で、「医療情報の案内」などは増えてはいるものの、36%の図書室では実施していない。

⑥ 患者図書室の図書の貸出についての調査は、制限が無くだれでも（病院に関係しない人でも）が微増で、「入院患者だけ」が半数を占めている。

⑦ 今回新規に患者図書室に関わっている人の職種を調べた。（常駐している人ではない）医療・健康情報に仕事として関わる医師・看護師・司書の割合が少なく、事務系職員や　ボランティアが主に関わっていた。

⑧ 医学部図書館との連携については、「実施している」が横這いであるが、「実施していない」が大きく増え、22院約8割が「交流がない」「管理部門が違う」「図書館の性質が違う」「必要がない」「ボランティアとの交流は不要」「連携する業務がない」などの理由で実施していない。実施している内容は「古本をもらっている。資料収集や購入。図書の寄贈。利用者の問い合わせ。」などであった。

⑨ 新規質問の公共図書館との連携については、「重複する書籍をもらっている」「図書館システムの共有」「資料の収集」「リサイクル図書の資料収集」「四半期に1度100冊を借りている」など積極的に行っている患者図書室がある反面、22院（約8割）の患者図書室では「近くに公共図書館がない」「交流がない」「提携する業務がみつからない」などの理由から実施していない。

３−５．医学部図書館の調査

患者図書室への調査と同時期に、42大学の医学部の図書館にも前回同様の質問を行った。回答館は34館から31館と減少している。

患者図書室との連携を聞いたところ、実施していないが前回の56%から90%へと大幅に増加した。理由として、「組織が違う」「扱う図書が違う」「建物が違う」などの意見のほか、「患者図書室からの要望がない」という回答も多い。

４．特異な患者図書館の実地見学

４−１．実地見学患者図書室の選定

アンケート調査から、次の患者図書室を選んで実地調査をした。

① 患者図書室に司書がいると回答を得た中より、島根大学病院を選定した。先行調査でも実地調査を行っている。

② ボランティアだけで運営している患者図書室として、鳥取大学病院を選定した。

③ ボランティアが運営する患者図書室とは別に、医療関連図書を提供している場所がある名古屋大学病院を選定した。

④ 専任司書が運営する市立図書館と連携した患者図書室として、信州大学病院を紹介する。

４－２．国立大学法人島根大学附属病院　患者図書室「ふらっと」

見学とインタビュー調査日時：2018年12月10日、午後（前回調査：2007年9月）

場所：島根大学医学部附属病院患者図書室「ふらっと」

対応者：原綿雲氏（「ふらっと」専任司書）

2004年に附属図書館医学分館（以下、医学分館）から附属病院に患者図書室設置を提案した。設置のためのワーキンググループ（以下、WG）には、病院長、看護部、薬剤部等の病院各部局と、 医療支援室、 医学分館の職員が参加した。医学分館から、患者図書室のサービス内容や方針の具体的なモデルが提案され、ほぼそれに沿って了承された。このWGは図書室開設後解散した。

患者図書室の施設は、病院事務部の医療サービス課医事係に属し、非常勤ではあるが専門職として採用された図書室司書が1名常駐している。

患者図書室についての規程、運営委員会、選書基準等は存在せず、これらの整備が課題とされている。

設置当初は出雲市から2005年度～2006年度に、患者図書室整備事業として年額100万円の「地域協力資金」を受けていた。施設整備費と資料費はこの寄付金を充てたが、現在は資金の提供は受けていない。

年間予算は配分されておらず、病院の診療経費から年間約15万円を図書購入にあてている。雑誌・新聞等の定期刊行物についても診療経費で購入している。

2018年3月までに受け入れた図書は約4,500冊（前回は2,589冊）で、映像資料も220タイトル所有している。「医療・健康関連図書」、「闘病記・医師のエッセイ等」を購入、一般図書は主に寄贈による。健康分野の雑誌3誌（健康分野2誌、社会・自然分野1誌）、新聞3紙が置かれている。

部屋は2018年に病院再開発で移転し、43平米（以前は約25平米）となった。

インターネットが使えるパソコン2台、プリンタ1台、6人がけの机1台、 1人かけの机2台、受付用カウンター机1台、巡回用ブックトラック1台がある。

図書の分類は、一般図書にはNDC（日本十進分類）を用いているが、医療に関する図書は疾患別に並べるため、米国国立医学図書館分類（NLM Classification）をもとに、 医学分館が独自の分類を作成した。ラベルの色によって医療関係、闘病記、一般図書を分けている。

2016年以前は、開室時間を平日9:30～16:00（12:00から1時間は休憩のため閉室）していたが、開室時間の延長についての要望があり、6:30～21:30に延長している。また、2017年より休院日である土日祝日も開室し、365日利用可能となっている。

貸出は、入院及び外来患者とその家族だけに限っている。1人2冊1週間を基本としているが、入院患者は希望すれば何冊でも貸出可能にするなど、臨機応変に対応している。コピーなどの短時間利用であってもすべて貸出としている。貸出方法は申込書（何冊借りても記入は一枚のみ）に記入し、図書に入っているブックカードをクリップで留めて所定の

場所に入れることで完了するので、職員の不在時でも利用者自ら対応できる。返却はブックポストも用意されている。教職員用に専用の寄贈図書回収箱が大学構内廊下三ヶ所に置かれていた。

週に3回、病棟（特殊病棟を除く）を巡回して、一般図書の出張貸出をボランティアと行っている。入院患者より希望があれば医療関係図書も持参している。

利用者用パソコンは平日の8:30～17:15までとし、1回30分を目安に利用できる。医療情報や公的な申請書であれば、無料で印刷している。

2017年利用統計によると、1ケ月平均、約600人が利用し、貸出冊数は約500冊、インターネット利用は約80件である。月ごとの利用者数の変動はそれほど大きくない。

レファレンスは月2回程度である。他機関への資料複写・借用依頼は現在のところ実績はない。

各病棟談話室に、図書室の蔵書リストとリクエストボックスを設置して、病室まで希望の図書を届けているほか、小児科病棟では週に1回、ボランティアと共同で紙芝居や絵本の読み聞かせを実施しており、病室や病棟から出ることができない入院患者に大変好評である。

利用案内は、ホームページ、入院案内に掲載している。待合ホールのテレビでも院内情報として広報している。また、新年度ごとに新刊のお知らせの掲示をしている。

待合ホールの一角のため立寄り易い場所にあるせいか、図書とは関係ない世間話をする利用者も多い。また病気の話題から院内での相談窓口を探している場合もあり、医療サービス課に問い合わせて適切な窓口を紹介している。

病院情報（2017年度）

1日あたりの平均外来患者数　1,160人　　病床数　600床

おおよその病院職員数　1,550人

見学後の感想

院内の待合室より患者図書室までの案内掲示があり、上手に誘導している。当日の新聞が図書室入り口の廊下に置いてあり、図書室か隣接の患者休憩室で閲覧するように指示されていて、集客効果があるように思えた。図書室内は壁面に書架が設置され、図書に囲まれている居心地の良さを感じた。室内にある掲示物も説明がわかりやすかった。

原稿作成にあたり連絡を取ったところ、2019年度中には書架の増設などの改修工事を行い、さらに利用しやすい環境に整える計画もあるとのことで、今後も病院における患者図書室の役割が、大きくなっていくものと推察する。

４−３．国立大学法人鳥取大学附属病院　患者図書室

見学とインタビュー調査日時：2018年12月11日、午後

場所：鳥取大学医学部附属病院患者図書室

対応者：2018年度　渡部一雅氏（医事課）　　補足調査　末廣徹氏（後任者）

1998年頃医事課を中心としたメンバーで計画し1999年に開室した。

図書室は2つに分かれている。

［外来患者向け図書室］1つは、外来・中央診療棟1階に「ほっとラウンジ」があり、中に「患者図書室」「情報検索コーナー」が設置されている。利用は平日の8:30～17:00で、医学書や主治医の説明をより一層理解できるように、病気や治療、薬について情報を取得できるツールとして、情報検索用パソコン2台を設置している。主に外来患者向けで、図書の貸出や印刷は行っていない。各種病気のパンフレットなどは自由に持ち帰りができる。パソコンの利用は、1人30分以内で、病気に関する事以外で利用しないように呼びかけている。パソコンの使い方などの指導をするボランティア「情報検索アドバイザー」が、平日14:00～15:00の間対応している。

［入院患者向け図書室］もう1つは入院患者向けの図書室で、館内サインなどに全く記載されていない入院患者用の「秘密の図書室」がある。病棟の5階エレベーター前ホールをパーテーションで区切り、6平米ほどの図書室として、「患者図書室」の看板が掲げられている。以前は別の場所にあったが、入院患者の利便性を考えて現在の場所に移転した。

資料費は無い。図書は全て寄贈本で、一般図書約2,700冊、闘病記300冊、一般向け医療健康書200冊がある。米子市立図書館から4半期ごとに100冊の図書を借りていて、入院患者へ貸し出している。図書の分類番号は付いていないが、分野毎に背に色テープが付いている。小説などは著者のアイウエオ順で並べられている。図書は入院患者が退院の際に寄贈することが多い。

病院外への持ち出しは禁止されている。貸出は9:00～17:00までの開室時間中にできる。入院患者は備えつけられたノートに記載して持ち出すが、返却時は返却ボックスに返し、それをボランティアが貸出ノートから削除している。

ボランティアは病院全体で60名ほど登録している。その中に患者図書室のボランティアは26名おり、本人の勤務希望を聞いて医事課の職員が割振る。ボランティアの在室時間は、その日の当番のボランティアが働ける時間帯なので、平日11:00～16:00までの間の2時間となっていて、1ヶ月分の在室時間割りが入り口に掲示されている。

また図書室ではないが、一般病棟（6箇所）のディルームに、3段式のブックトラックを設置して、一般図書やコミックを積んでいる。入院患者が誰でも持ち出すことができ、読み終わったらブックトラックに返すシステムで、1ヶ月ごとに各ディルームのブックトラックをローテーションで動かしている。

病院情報（2017年度）

1日あたりの平均外来患者数　1,472人　　病床数　697床

年間入院患者数　235,370人　　おおよその病院職員数　1,836人

見学後の感想

ボランティアが運営する図書室ということもあり、紛失する図書も多いようであるが、寄贈図書だけなのでそれほど深刻に心配していない様であった。まれに米子市立図書館

から借用している図書も紛失するが、弁償などはしていないとの事である。

情報検索ができる端末が設置されているが、立ち上がったトップページから簡単に医療・健康関連の情報検索ができるように、リンクなどが張ってあれば良いと思う。

４−４．国立大学法人名古屋大学病院　患者図書室　および患者情報センター

見学とインタビュー調査日時：2019年2月27日、午前

場所：名古屋大学医学部附属病院患者図書室（つくし文庫）及び患者情報センター（広場ナディック）

対応者：三宅孝明氏（医事課患者支援係）

同病院には看護部職員を中心としたメンバーで計画し、2007年に開室した患者図書室「つくし文庫」と、医療情報を扱っている2006年開設された患者情報センター「ナディック」がある。

つくし文庫の場所は、2階の採血や検査をする窓口からも近く、メイン通路ではないが分かり易い場所で、館内の案内板にも記載がある。

約41平米の部屋で、病院再開発時に現在地に移転してきた。開館時間は平日8：30〜11：30で、水曜日と金曜日は14:30まで延長している。

予算は無く、寄贈図書で運営している。患者とその家族が利用できる。蔵書は8,400冊。NDCで分類されていて、コミック類はタイトル順、小説は作者順で並んでいる。

貸出は「診療券番号」で行う。入院患者と家族は10冊、外来患者と家族は3冊で、3ヶ月間借りられる。（外来患者の次回来院日に合わせている）ボランティアが手作業で貸し出す。

返却は開館時間中に窓口か、返却ポストにて行なう。いずれも貸出時に渡された「図書返却カード」を本に挟んで返却する。

ボランティアは貸出返却業務のほか、寄贈図書にラベル等の装備を行なっている。

利用の少なくなった本は、カゴを用意してあり、不要図書である事を明示して持ち出し可能にしている。

患者情報センター：広場ナディックNADIC（Nagoya Disease Information Center）は、つくし文庫と廊下を斜めに挟んで設置されている。

平日10:00〜16:00まで開室していて、大学の元職員だった看護師や事務職員がボランティアとして交替で常駐している。患者だけでなく家族や地域住民も利用可能。

病院のホームページ[2)]によると、１ケ月あたり700人程度の患者さんが利用しているとの事である。

約300冊の幅広い医療・健康関連の図書が置いてあり（新しい本が多い）閲覧することができる。また多種類の病気に関するパンフレットが持ち帰ることができる。年50万円の予算で、運営している。

映画のDVDに限って入院患者さんに2泊3日で貸出をしていて、好評を得ている。

4台あるパソコンは、申込書を記載してから利用できる。ホーム画面は愛知県が作成している「あいち医療情報ネット」であった。医療情報だけを検索でき、印刷はできない。

入り口から手前に図書などが並んだ医療情報コーナー、奥には研修のできるスペースとなっていて、毎日映画の上映会があるほか、勉強会や学習会・講演会、手作り教室などが計画されている。また「おしゃれサロン」と称して、手にとって見ることができる医療用カツラや、術後の補正具を展示しているほか、毎週1回ウイッグについての相談会も開催されている。

ボランティアが対応できない相談があれば、患者相談窓口の方が来て対応してくれる。がん相談もできる。プライバシーを守るために個室が用意されている。

病院情報

1日あたりの平均外来患者数　2,230人（2018年7月）

病床数　1,080床　　年間入院患者数　313,436人（2017年度）

おおよその病院職員数　4,000人

見学後の感想

広場ナディックは、患者さんに必要ないろいろな支援を行なっていて興味を持った。病院患者図書室から娯楽性の図書を除いた、医療情報を提供する理想的な最適場所と思えた。

４－５．国立大学法人信州大学医学部附属病院　患者図書室「こまくさ図書室」の概要[1)]

2006年に当時の病院長から指示があり、病院新外来棟（2009年完成）に患者図書室を設置する事が決まった。医療福祉支援センターが開設担当となり、医学部図書館も加わって患者図書室の基本方針を決めた。当初はボランティアでの運営を考えたが、松本市立図書館（以下「市立図書館」）からの団体貸出図書を利用する事などを話し合っていく中で、病院購入図書も市立図書館システムに入力して図書館システムの一元化を図り、市立図書館の分館機能をもち、専任の職員を置く図書館にすることにした。2008年に病院長から市長に陳情し、2009年3月に協定調印式を行ない、同年5月に開室した。

図書室は１階の外来棟から病棟への通路脇で、だれもが入りやすい場所となっている。図書のほか、DVDやインターネットが使えるPC2台も設置されている。開館時間は平日の9:15～16:00まで。

蔵書については、一般図書は市立図書館の団体貸出の本約4,000冊を借受けるとともに、市立図書館の貸出端末を設置して、市立図書館の図書の取り寄せと貸出・返却ができるようにした。予約システムも利用できるので、来院日に合わせて予約図書をこまくさ図書室に配送してもらうこともでき、利用者の好評を得ている。返却BOXもある。

医学関連の図書は病院職員が選書して医学部図書館が購入し、市立図書館システムで管理している。医学関連図書は2019年現在5,500冊となっている。

病院が雇用した専任職員2名が半日交代で勤務しているが、両名とも市立図書館システ

ムの個人情報の管理を行うことから、市立図書館の委託職員の発令も受けている。市立図書館の貸出カードを使い、入院・来院患者やその家族の方が希望すれば、こまくさ図書室で貸出カードを発行している。貸出冊数は、市立図書館と同じ1人10冊まで2週間。2018年の統計では、1ヶ月平均600人が約1,600冊を借りている。そのうち日本十進分類の医学分野（490）は約100冊である。

利用者からの相談のうち、患者図書室専任の職員が対応できない病気などの相談であれば、「医療福祉支援センター」にて対応する。また詳細な医学書や文献検索についての相談であれば、医学部図書館を紹介するようになっている。

病院情報（2017年度）

1日あたりの平均外来患者数　1,467人　　病床数　717床

年間入院患者数　217,721人　　おおよその病院職員数　1,930人

５．考察

５−１．今回のアンケート調査結果からの考察

今回の患者図書室アンケート調査の結果から、次のように考察した。

① 国立大学病院に設置された患者図書室の多くは、前回と変わらず「医療・健康情報」の提供ができる環境に無い。

② 入院・外来患者向けの患者図書室の目的で設置され、扱う図書は一般書が多い。

③ 多くの病院は患者図書館を、医療情報の提供をする場所として考えていない。

④ 医学部図書館や公共図書館と連携をしている患者図書室は少ない。

⑤ 患者図書室が無い病院は未設置と回答があり、廃止されたとの回答は無かった。設置している病院は、患者図書室が必要と判断していると思えるので、全ての病院に患者図書室の設置を望みたい。

５−２．訪問調査からの考察

病院により患者図書室に対する考え方の差を感じた。

運営している職員やボランティアは利用者（患者）のために一生懸命に業務を行なっている。患者図書室は利用者（患者）の為にあることは、どの患者図書室であっても変わらない。運営者がボランティアだけの患者図書室であっても、入院患者が退屈しないような図書の提供があれば、利用者は満足してくれる。

どこまでのサービスをするかは、病院の考え方により大きく違ってくる。医療・健康情報の提供をするとなると、職員または専門知識を有したボランティアが必要となる。患者図書室自体は無料のサービス提供をする場所であり、収益を上げることができない。設置するかどうかは、その病院の経営戦略と言える。

今回訪問した３つの患者図書室では、明確に利用者を限定し、利用者が十分満足するサービスを提供していた。

６．患者（一般市民）に医療・健康情報を提供するには

６－１．インターネットの活用

2010年以降スマートフォンの普及が進み、だれでも簡単にインターネット検索ができる。

2014年の厚生労働省の調査[3)]では、医療・健康情報に接する機会としてテレビ・ラジオに次いで2番目にインターネットが多い。健康に関して必要な情報としては「からだについての情報」50.9%が最も多く、次いで「医療・医療施設についての情報」46.7%、「食事・栄養についての情報」35.7%などとなっている。

これらの情報をまとめて提供できるサイトがあれば、患者や一般市民でも、スマートフォンやパソコンによって医療・健康情報の検索ができる。

６－２．患者図書室のパソコン

４－２.から４－５.で紹介した患者図書室全てに、利用者用にパソコンが設置されている。これを使って利用者へ医療・健康情報を提供することは可能である。問題となるのは「質の高い情報」が検索できることで、それを導き出すための仕組みが必要となる。

また、定期的にメンテナンスを行い、リンク切れが無いように努めなければならない。

６－３．有益なサイトについて

① 各都道府県には、県ごとに特色ある医療機関を検索できるサイトがあるが、医療・健康情報まで提供していない。地方公共団体ではないが横浜市医師会のホームページ[4)]では、病気毎に予防接種ができる病院や、対応可能な外国語もわかる検索システムもある。

② 医学関係学会が運営するサイト
医師が加入している各専門分野別の学会では、一般市民向に病気の紹介、治療方法を解説しているサイトを開設している。多くの学会では、一般市民にもわかりやすく病気について説明している。
一般市民が既知の病気について調べるには大変役に立つが、知りたい病気を扱っている学会のサイトを調べる方法については、確立されていいない。

③ 特定非営利活動法人 医療の質に関する研究会（略称：質研）「しらべる君」[5)]
医療関連情報のリンク集で、患者図書室の図書分類と同じような分類に沿って独自に整理してあり「電子患者図書室」ともいえるもの。優良なサイトだけを集め34の項目に分けてリンク先を提供している。

④ 図書館員の作成したサイト
2019年2月に愛知医科大学の患者図書室「健康情報室アイブラリー」を見学する機会を得た。インターネットに接続したパソコンから、医療・健康情報へのリンク画面が

立ち上がっていて、クリックすることで必用な情報が入手できるようになっていた。図書館員が作成している事から、利用者の求める情報のニーズがわかっているので、画面構成が分かり易かった。

愛知医科大学患者図書室設置パソコン(14画面中最初の4画面).pdf

⑤ 「hlib.jp」への期待

2018年に開催された第35回医学情報サービス研究大会（MIS35）において、ライブラリアン主体の 医療・健康情報サイト「hlib.jp」の構築が小嶋智美から提案された。[6)] 日本病院図書館協会が運営していた「Web患者図書館」は、健康法、病気の解説や治療法などについての一般向けの「医学書・医学雑誌・新聞記事」を検索できたシステムであった。検索の他にも、治療方法や医薬品の探し方、病院ランキング、闘病記・患者会、がん情報、特定の病気や治療法を専門とする医師や病院、病気の予防、医療費など、病気に関連するあらゆる事象を探すことができた。今はサイトが閉鎖されて利用できない。

「hlib.jp」は有名検索システムとも連動して、医学関連のいろいろなリソースに医学中央雑誌が無料公開している「医学用語シソーラス」を付けることで、自由語のみならず統制語でも検索できる様にシステム設計されている。また図書館員が選定した一般向け医療・健康情報のリソース集を作ることで、選書の際のお役立ちツールとしても活用が見込まれる。「Web患者図書館」に代わるサイトの立ち上げに期待している。

６－４．Webサーバーの統一

各病院患者図書室の検索画面のトップページは各病院ものであっても、その先の検索方法やリンク先などは、同じシステムを使うのであれば、メンテナンスも楽である。Webサーバーとして大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）[7)] を使う事を提案したい。

７．謝辞

調査にご協力いただいた全国の患者図書室、医学部図書館の皆様にお礼を申し上げる。

また、先行事例のデータを提供してくれた土出郁子氏（現在大阪大学附属図書館）に感謝したい。

参考文献

1）折井匡，信州大学附属病院に市立図書館の機能を持った患者図書室ができます，全国患者図書サービス連絡会会報 2009;15（4）:65-68

2) 名古屋大学医学部附属病院「ナディック」
https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/guide/facilities/nadic/（参照2019-12-6）
3) 厚生労働省　健康意識に関する調査（2014年2月調査）
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000052548.html（参照2019-12-6）
4) 横浜市医師会　http://www.yokohama.kanagawa.med.or.jp/（参照2019-12-6）
5) 質研ホームページ　http://shitsuken.info/index.html（参照2019-12-6）
質研は、患者図書室の設置援助プロジェクトを実施して、全国50の病院に患者図書室を設置している。国立大学病院においても２大学の病院が応募し患者図書室を設置した。
このプロジェクトの目的はホームページの説明によると、① 患者の多様な医療情報ニーズにこたえる。② 医療従事者が『患者図書室』を活用して、医療に関する説明の質と効率の向上を図る。③ 患者と医療従事者のコミュニケーションを促進することによって、『協働の医療』を推進する。との事で、利用者への質の高い医療情報の提供を目的にしている。
6) 小嶋智美, ふじたまさえ, ライブラリアン主体の医療・健康情報サイト『hlib.jp』の構築と運用：第35回医学情報サービス研究大会（MIS）口頭発表　抄録
http://mis.umin.jp/35/program/ab/o-09.pdf（参照2019-12-6）
「hlib.jp」 Libraryの“lib”に“h”をつけたもの。小嶋が行なった講演によると「h」は「health」「hospitality」「humanity」「ひと（hito)」「healthy」「hearty」「honest」「ほっとする（hottosuru)」などの意味があるとのこと。
7) 大学病院医療情報ネットワーク（University Hospital Medical Information Network = UMIN）全国42の国立大学病院のネットワーク組織。東大病院内にセンターが設置されている。現在は国立大学病院以外の医学・医療関係者も利用ができる。
https://www.umin.ac.jp/umin/（参照2019-12-6）

- IFLAディスアドバンティジド・パーソンズ図書館分科会作業部会編, IFLA病院図書館ガイドライン2000, 日本図書館協会, 2001.
- 菊池佑、菅原勲編著, 病院と図書館, 明窓社, 1983.
- 菊池佑, 病院患者図書館, 出版ニュース社, 2001.
- 全国患者図書サービス連絡会編, 患者さんへの図書サービスハンドブック, 株式会社大活字, 2001.
- 患者図書マニュアル編集委員会編集, 患者医療図書サービス, 病院図書室研究会, 2004.
- 戸ケ里泰典　中山和弘, 市民のための健康情報学入門[放送大学教材], 放送大学教育振興会, 2013.
- 福田洋、江口泰正編著, ヘルスリテラシー, 大修館書店, 2016.

- 特定非営利活動法人日本医学図書館協会　医療・健康情報ワーキンググループ編著, やってみよう図書館での医療・健康情報サービス, 丸善, 2017.
- Ｅ・カザリン・ジョオンズ　佐々木剛訳. 病院図書館. 臨床文化. 1941;6（2）:34-54.
- Ｅ・カザリン・ジョオンズ　佐々木剛訳. 病院図書館発展史. 臨床文化. 1941;8(6):32-361941;8（10）:18-27

（本研究はJSPS科学研究費奨励研究18H00008の助成を受けたものです）